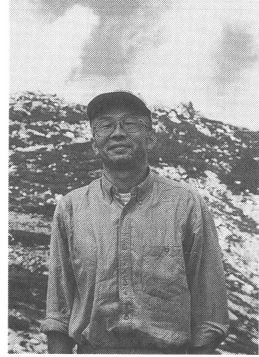


中村 一 会員の逝去を悼む

2003年10月18日(土) 15時54分に中村一・気象庁予報部数値予報課長が「感染性心内膜炎」のために千葉県流山市の東葛病院で亡くなった。10月8日(水)から風邪で職場を休んだと聞いていたが、12日(日)に脳卒中ということで緊急入院してそのまま帰らぬ人となってしまった。享年54歳。21日(火)の通夜には450人近く、また22日(水)の告別式には雨にもかかわらず250人近くが集まり、彼が多くの人に慕われていたことがわかる。告別式では北出武夫・気象庁長官と東大ワンダーフォーゲル部同期の井上準二氏が弔辞を読まれた。ワンゲルの友人らはそのまま火葬場までついて行って彼に最後のお別れをしたという。

彼の略歴を簡単に紹介したい。1972年東京大学理学部を卒業後、同大学院に進学し、チベット高原が日本付近の流れに及ぼす影響について研究にいそしんだ。気象庁には1977年に採用され、広島地方気象台へ勤務することになった。そして翌1978年から1985年まで東京大学に出向した。1980年には博士課程の研究成果である「大気大循環に及ぼす山岳の力学効果」が高く評価され、日本気象学会山本賞(現在の山本・正野論文賞)を受賞した。山本賞は設立されたばかりで、彼はその最初の受賞者という栄誉を受けた。大学では学生の指導に当たる傍ら、ハワイ大学、米国大気研究センター(NCAR)にも滞在し、チベット高原が日本付近の流れに及ぼす影響についての研究をさらに進めた。また当時日本ではグラフィックソフトはあまり一般的ではなかったが、NCARからNCARGというグラフィックソフトを持ち帰り、彼(と増田耕一会員・地球フロンティア研究システム、萬納寺信崇会員・気象庁)は日本に移植した。NCARGは当時米国の気象界ではもっともポピュラーなグラフィックソフトであって、多くの人がその恩恵を受けた。

1985年に気象庁予報部数値予報課に配置換えとなった。ここでは大気大循環に関する豊富な見識を持って、今日の天気予報を支える大気現象の予測技術開発に尽力した。当時は数値予報ルーチンシステムの更新の時期にあたり、巽保夫会員(元気象研究所長)により開



発された領域スペクトル法を適用して、アジア域領域モデル(Asia Spectral Model)や日本域領域モデル(Japan Spectral Model)等が現業化された。彼はそれらを包括する領域グループのリーダーとして中心的な役割を果たした。

1989年には気象庁予報部業務課に転じ、航空気象業務と海上気象業務の改善・高度化に尽力した。航空気象業務においては、「航空気象作業指針」を刊行したほか、次世代の航空気象業務態勢の基本構想を構築した。また海上気象業務においては、1992年2月の国際的な船舶向け情報提供の枠組みの大幅改正に向けて、関係部署との調整や全般海上予・警報、漁業気象通報等の改正などに尽力した。

1992年からは気象大学校助教授を4年間勤めた。ここでは学生に対するゼミや卒業論文の指導を積極的に行った。また大学部のカリキュラムの大幅な見直しや研修体系の見直しにも意欲的に取り組んだ。

仕事の傍ら、1986年から1996年まで日本気象学会の常任理事を5期10年間務め、1996年から1998年までは監事を務めた。ここでは庶務、講演企画委員会、会計、奨励金・各賞候補推薦委員会、気象研究ノート編集を担当し、関連学術活動の推進に努力し我が国の気象学会の発展に尽力した。また事務局の強化に意を注ぎ、会員のボランティア的貢献に頼らず日々の事務の運営ができるような体制が実現した。

1996年には気象研究所予報研究部第2研究室の室長に転任した。ここでは主に数値予報モデルの初期値作

成技術の開発や全球測位システム（GPS）衛星からのマイクロ波データを使って可降水量を求める手法の開発等に励んだ。特に後者に関する研究では彼はその中心的な役割を果たし、GPS 気象学という新しい研究分野を生み出し現在の気象学のトレンドの一つとなった。また下館ヘダウンバーストの現地調査に行ったりGPS ダウンルッキングでは富士山に登って観測したり、野外観測にも積極的に携わった。

こうした豊富な研究業績と業務経験を持って、2002年に気象庁予報部数値予報課長として着任した。ここでも、彼は数値予報技術開発全体に的確に指揮・指導した。最近では国際プロジェクト THORPEX（観測システム研究予測可能性実験）において、国際中核運営委員会の委員を務めるとともに、アジア地域委員会議長としてアジア各国の数値実験・観測計画のとりまとめ等を行っていた。

私が彼を知ったのは1971年に大学院にやってきた時である。その同級生に中村健治会員・名古屋大学地球水循環研究センターがいて、同じ中村では困るということで私たちは親しみを込めて「はじめ」と呼んだ。

「けんじ」氏は大学院時代の彼の思い出を、“遊びまわっている時でも静かに研究を続けており、我々がテニスなどで暗くなってから部屋に戻ってきても、当時部屋の助教授であられた松野先生（地球フロンティア研究システム）と討論している、というようなことが何度もあった。彼の静かな態度はその後も変わらず、ものを聞いたり頼んだりすると、少し恥ずかしそうに笑いながらも常に気持ちよく対応してくれた。”と語ってくれた。このように、研究はもちろん彼はテニスや登山やスキーなども得意であり、何事につけ我々のリーダーであった。若い時に私は彼に連れられて巻機山（新潟県）に登ったことがある。その時に彼が山道を疲れた顔することなく先導してくれたことを思い出す。また気象研時代にはいつもにこやかに私たちに接してくれた顔を思い出す。頑健で温厚な彼がたった10日間の闘病生活で逝ってしまうなんてまだ信じる事ができない。また奥様と二人のお嬢さん（高校1年）を残して逝ってしまったのも彼にとって極めて心残りのことであろう。心より彼のご冥福を祈りたい。

（吉崎正憲・気象研究所予報研究部第1研究室長）

追記

5期10年に亘って気象学会の常任理事であった中村さんは、会計担当という重い役割を果たされた。その当時は事務体制が2人で、年々増える事務に対応するのが困難であり、そのため、学会が社会の期待に応える事業に積極的に乗り出すには基盤がぜい弱であった。その打開策の一つとして先ず事務局員の増員を総合計画担当理事の私が練り、その予算的裏打ちという困難な仕事を中村さんが整え、目的は実現した。色々な面での学会運営において、中村さんは常に裏方として難事を受けて立ってこられた。学会の諸事がスムーズに運んでくれたのも、表には見えにくいところでの中村さんの献身が背景に流れていることを忘れてはならない。

「山を歩く人は皆いい人だ」と語ったことがある。中村さんは、山を歩きながら、人間が好きだったのだな、と今にして思う。

（木田秀次／学会常任理事）